

峠の道『数字の歌碑』

やす

9月中旬に旧友の山仲間が軽井沢へ遊びに来るといので、山に関連したところはないものかと考えた。旧碓氷峠の「見晴台」という眺望のきく処を思い出しそこに連れて行った。旅慣れた人には、周知のことかもしれないが、改めて紹介したいことがある。

その近くに、熊野神社という峠の神社がある。群馬と長野の県境が社殿を通り、群馬県側は熊野神社、長野県側に熊野皇大神社の社務所がある。熊野神社が管理するという、〈一つ家の碑〉(右写真➡)が群馬県側の旧中山道を300m下り、さらに脇道を200m進んだところに高さ約1m余の石碑がある。



「八万三千八三六九三三四七一八二四五十三二四六百萬四億四六」① さあ一何と読む？

この数字の歌の作者は、言い伝えによれば、武蔵坊弁慶が逃避行のさなかに心中を数字に託して、爪で彫ったという「弁慶説」のほかに2-3の説があるという。碑は江戸前期の寛永年間に建立されたというが、約10km北西にある浅間山が1783(天明3年)の大噴火で流失し、現在の碑は1917(大正6年)再建されたそうだ。

他にも数字の歌碑があり、峠の茶屋の駐車場の奥に「みくにふみの碑」があった。

「四四八四四七二八億十百三九二二三四九十四万万四二三四万六一十」②

もう一つは長野県側の別の茶屋の駐車場脇にあった。

「四八八三十一十八五二十百万三三千二五十四六一十八三千百万四八四」③

〈渡辺重石丸の数字の歌〉とある。重石丸は、幕末から明治期の国学者で乃木希典が師事したことで知られる。三基の数字の歌碑に結びつきはないが、数字はユーモアが流行した元禄文化の言葉遊びを髣髴とさせて面白かった。

(読み方) ① 「山道は寒く寂しな一つ家に夜毎身にしむ百夜置く霜」

② 「よしやよし何は置くともみ国書よくぞ読まし書読まむ人」

③ 「世は闇と人は言ふとも正道に勤しむ人は道も迷はじ」

その夜は、小学校の国語の担任の恩師(95歳で健在)の話や中・高校で共に教えてもらった中村草田男先生の話で遅くまで昔話に花が咲いた。

翌日、西上州「荒船山」を知る人ぞ知る荒船不動尊から経塚山一とも岩を気持ち良く晩夏の山道を逍遙した。

(了)